

令和元年5月21日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284086

研究課題名(和文) 東アジア「近世化」と秩序意識の比較社会史

研究課題名(英文) Comparative History of Early Modern East Asia

研究代表者

山田 賢 (YAMADA, masaru)

千葉大学・大学院人文科学研究院・理事

研究者番号：90230482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、16世紀以降から近代初頭までの長い「近世化」の時代を対象として、東アジア各地域とりわけ日本列島・中国大陸、そして朝鮮半島において生成された秩序を比較史的な観点から検討したものである。その結果として、それぞれの地域における伝統社会の形成を、東アジアという統合的な視点から理解することが可能になったと考える。なお、本研究は、日本の研究者のみならず、オーストラリア・イタリア・中国などとりわけ浙江工商大学の研究者との交流によって進められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジア各地域の「伝統社会」は、16世紀以降の近世化の過程において形成されたと見ることが現在では広く共有されつつある。いわばこの16世紀から19世紀までの長い近世化の過程において、東アジアは共通の歴史変動を経過しながら、しかも異なった社会・文化を成熟させていったと言える。その意味で、東アジア各地域の社会的・文化の独自性が顕著な形で成熟し、それが近代国家へと継承されていった原点であるとも考えられる。したがって、東アジア近世の社会、規範意識などを比較史的な観点から探求することは、近現代の東アジアにおける社会と国家を遡及的に考察することでもあり、学術的にも、また社会的にも大きな意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research project is intended to make clear the order created in each region of East Asia from the 16th Century to the 19th Century. As a result, I think that it became possible to understand the formation of traditional society in each region of East Asia. This research project was promoted not only by researchers in Japan, but also by researchers from Australia, Italy, China, especially from Zhejiang Gongshang University.

研究分野：中国史

キーワード：東アジア 近世化 比較史 秩序

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中国史研究において「近世」という語彙は、必ずしも共通の理解のもとに使用されてきたわけではない。かつて宋から明清の時代を「近世」と見るのか、それとも「封建制」と見るのか、という時代区分にかかわる論争が存在したためである。一方、日本史では「近世」という語彙は当然のように定着しているのだが、これに倣って中国・朝鮮・日本など、東アジア地域の同時代を「近世」と呼んだとしても、各地域における社会の内実はあまりにも異なるゆえに、そこに実体的な共通性としての「近世」的性格を見いだそうとする試みは困難に逢着するだろう。だが、それは必ずしも、東アジア諸地域の「近世」を、何らかの共通の枠組のもとに記述することの放棄・断念を意味するわけではない。一見した限りでは懸隔ばかりが大きいように思われたとしても、長い時間軸に基づく歴史的な視座を設定するならば、それらを統合的に叙述する方法を立ち上げることは可能であり、東アジア諸地域の歴史叙述の全体性を回復するために、比較史的な叙法を自覚的に鍛えていく必要があるだろう。

この観点から注目されるのは、16世紀の銀流入とともに北東アジア全域を覆った共通の歴史的「波動」を論じている岩井茂樹、岸本美緒らの研究である。具体的には、16世紀の東アジアにおいて同時的に生じた現象は、(1)商業ブームと好況、(2)人口増と人の移動、(3)社会の流動化、(4)旧秩序の解体と新勢力の台頭、等であった。岸本は、かかる16世紀の広域的な衝撃を受けて、これに対処するためにそれぞれの地域でそれぞれの秩序再構築が進行していったひとまとまりの時間を「東アジアの「近世」」と呼んではどうか、という注目すべき提言を行っている。

本研究プロジェクトは、こうした岸本らの「近世論」に触発されながら、16、17世紀から19世紀までの長期社会変動を、混乱の中から再定立された秩序、ならびに秩序意識が、個人の心性・意識に内面化されつつ、社会の隅々まであまねく浸潤していき、かかる基礎に立脚した秩序の総体＝「伝統社会」が、東アジア諸地域において並行的に成熟していく「近世化」の過程として位置づける。すなわち、16世紀の衝撃を受けた再秩序化が社会に緩やかに浸透していく長い「近世化」の過程は19世紀まで継続し、伝統社会の論理と心性はむしろ19世紀にこそ完成したのではないかと、という見通しが本研究の背景となっている。

たとえば、日本列島の19世紀は、地域におけるさまざまな社会集団が歴史的伝統のなかに自らの正統性を求め、主張しあう「由緒の時代」(久留島浩)であったとされるが、それはただ幕末の動揺という同時代の社会状況に由来するばかりではなく、17世紀頃までに生成された秩序と秩序意識が地域社会の基層にまで浸透し、共有されるようになっていたからこそあるべき歴史の記憶の語りが可能だったのだとも考えられよう。そして、「伝統社会」の完成期である18、19世紀において、地域の多様な社会集団がその来歴と記憶を語り出す「由緒の時代」は、日本列島だけの現象ではなく、中国大陸・朝鮮半島などにも同様に訪れていた。こうした状況を、東アジア全域を覆っていた長期的歴史変動の帰結であると考えれば、これら複数の現象を「東アジア」という同一の視座に収めた上で、巨視的に鳥瞰する比較史の試みが必要ではないだろうか。本研究プロジェクトの基本的な視座は、以上のような背景の下に定められた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国大陸・朝鮮半島・日本列島などを包括する東アジア諸地域を対象に据えて、16世紀における世界的変動の衝撃の後に進行した秩序の再構築(「近世化」)過程のもとで、基層地域の内部に育まれた秩序・秩序意識を比較史的に検討するとともに、それをそれぞれのかたちで継承したそれぞれの「近代」を展望することにある。

16世紀は、ヨーロッパ人によってアメリカ大陸から持ち出された大量の「銀」が世界中を駆け巡ったが、とりわけ、東アジア・東南アジア海域にはヨーロッパから持ち込まれた銀が滞留し、貨幣流通量の増加は好況と人口増、商業化戦略と人口移動という社会変動を惹き起こしていた。こうした人口増と商業化、人の移動は、16世紀から17世紀には日本列島や朝鮮半島も含む東アジア全域において発生していたと思われるのだが、18世紀以降、中国大陸と朝鮮半島・日本列島は異なった道を歩むことになる。朝鮮半島・日本列島では人口は微増傾向へと軟着陸したのに対し、中国大陸では20世紀に至るまで止まることのない人口増が続いた。その背景にあったのは、中国大陸とその周辺に広がっていた莫大な内部境界の存在、そして19世紀に至るまで流入し続けた「銀」とそれによって持続した好況基調であった。そのような全体状況の中から、あらためて近世中国大陸内部の移住・開発を取り上げ、移動の発生するメカニズム、移住地において再構築される社会関係の特質、移住者を受容した地域社会の変容などを再確認する。(最近のまとめとして、山田賢「漢族の国内移住について その2：歴史学における研究概観」丸善出版、2017年、14～17頁)。

以上の方向性と緊密に関わるが、近世東アジア世界を比較史の観点から鳥瞰することである。上述のように、中国大陸では止まることのない人口移動が周辺地域を埋め尽くすように驀進していたのだが、日本史や朝鮮史においては、概ね17世紀末以降、当時の技術水準において開発可能な内部境界の消滅とともに、人口増も停止したと考えられている。ここにおいて、中国大陸・朝鮮半島・日本列島は、16世紀の潤沢な「銀」流入による好況と人口増という同一の歴史的条件下から出発しながら、それぞれ異なった社会体制を洗練させていったと考えられる。とりわけ

日本列島では、人口増停止とともに、相対的に人の移動に乏しい「冷えた」社会に適合的な組織化が進んだと想定されるのだが、中国大陸では、人が移動し続ける熱気に満ちた流動的な社会を前提に、流動的なままに社会を安定させるシステムとして広域的ネットワークが張り巡らされていく。例えばそれは、「血縁」を媒介にした「宗族」のネットワークであり、あるいは、義兄弟的な盟約の結合に基礎を置く「秘密結社」のネットワークだった。東アジアの近世とは、16世紀の衝撃「人口増と流動化・不安定化する社会」をそれぞれのかたちで内部に吸収しながら、安定的に維持されていくそれぞれの「伝統社会」を構築していく「近世化」の過程であったとも言えるのである。この過程を比較史的に俯瞰することが、具体的な目的の一つである。また、こうして構築されていった伝統社会の末にある近現代東アジアにおいて、日本社会が如何に中国をはじめとするアジアを認識したのか、という近現代日本のアジア認識、あるいは近現代東アジア域内における「近代化」の問題も重要である。上記のように、東アジア各地域は、16世紀の同一の衝撃から出発しながら、その後の「近世化」過程の中で、異なった様態の「伝統社会」をそれぞれのかたちで洗練させていたし、それに伴ってそれぞれの社会におけるイデオロギーもまた異なった様態に帰結してははずだからである。例えば、東アジア正統イデオロギーとしての儒教にしても、それぞれの地域の社会様態にふさわしいかたちで修正と「土着化」が図られた上で受容されていたと見るべきなのであり、決して単一の知的体系がコピー＆ペーストされたわけではない。それぞれの地域におけるそれぞれの伝統社会のかたちを明らかにすべきなのであると言えよう。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、中国大陸・朝鮮半島・日本列島の17～19世紀を研究対象としてきた研究者による共同研究によって、東アジアを横断的に検討するものであった。これにより、中国史・朝鮮史・日本史それぞれの領域において積み重ねられてきた高いレベルの実証的成果を、開かれた比較史検討の場へと引き出していくとともに、「近世化」の展開という歴史的な大きな変動過程の一環として位置づけることを目指した。近年、とりわけ日本近世史研究において比較史の必要性は提唱されてはいるものの、東アジア比較史の試みは、いままお相互の懸隔を確認する萌芽的な段階に止まっており、「比較」を可能にするための成熟した相互理解と方法を獲得していない。したがって、(1)縦断的な長期歴史変動の観点、ならびに、(2)横断的な広域的な地域間比較の観点を導入しつつ、まずは我が国における近世東アジア研究の成果を統合的に掌握するとともに、中国などをはじめとする海外の研究者を招聘、あるいは海外に渡航してディスカッションの場を設けることで、比較史の方法を鍛えていくことを目指した。

4. 研究成果

恒常的には中国近世史研究者、日本近世史研究者をコアメンバーとして、それぞれのテーマに基づく個別実証研究を遂行しつつ、定期的に海外からの招聘を含む他の研究者との研究交流を実施した。

国際交流についてはとりわけ浙江工商大学東方語言学院日本文化研究所の研究者と研究期間を通して緊密な交流を実施し、浙江工商大学へ渡航しての研究成果の講演会、あるいは浙江工商大学研究者を招聘しての国際シンポジウムやワークショップなどを開催した。また、2016年度には国際シンポジウム「「国境を越えた歴史」が問いかけるもの」を開催、オーストラリア、イタリア、中国から日本研究者を招聘（オーストラリア国立大学 トモコ・アカミ教授、ベネチア・カ・フォスカリ大学 ローサ・カーロリ教授、浙江工商大学 王宝平教授）、それぞれ近世～近代移行期における文化交流と接触、その中から立ち上がる地域アイデンティティーなどについて議論を深めることができた。なお、これらの講演会、国際シンポジウム、ワークショップなどは、研究者の参加のみにとどまらず、一般学生、大学院生、市民の参加も得て行われたものであり、研究成果の社会的発信に資するものであった。

なお、本研究プロジェクトでは、まずはそれぞれの研究者が個別に実証研究に従事したが、そこにもいくつか共通の切り口を設けた。第一は、「地域」アイデンティティーの成立と「地域」にかかわる記憶、あるいは語り口である。近世末期にはとりわけ中国大陸や日本列島では盛んに地方志・地誌が編纂されるとともに、地域住民のアイデンティティーに結びついた地域意識（「郷土」意識）が顕在化する。すなわち、編纂される地方志・地誌自体が「郷土」の記憶を鑄込まれた歴史の語りであり、このような「郷土」意識の生成過程を、それぞれの地域に即して検証し、比較史に向けた基礎的な史料整理を実施することができた。第二は、「明君」、「名宦」、「名士」の記憶である。あるべき地域秩序を護持して地域社会の安寧をもたらした「明君」、「名宦」、「名士」の伝承は、一面では地域の来歴にかかわる記憶であり、一面ではそれぞれの「伝統社会」が共有していた規範的秩序を具現化した表象であったと言えよう。だとすれば、「明君」、「名宦」、「名士」の伝承や語り口は、それぞれの社会における秩序意識の定着過程と特質を展望できる有効な分析対象であり、とりわけ日本近世史を対象としてかかる分析を実施した。第三は、伝統社会における「知」の体系の成立と、その出版による伝播と共有である。伝統社会を支えた規範意識や価値体系は、成立とともに出版等の媒体によって社会に共有されていくのであり、この方面からの研究を進めることもできた。

研究期間において発表された論文・著書・口頭発表などは、いずれも上記のような問題意識を内在化させたものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計12件）

- 小関 悠一郎「江戸時代の政治と武士の学び」『歴史評論』813号、2018、pp.29-36、査読有。
- 佐藤 仁史「迷信与非遺之間：關於江南民間信仰与婦女的一些思考」『民俗研究』2018-1、2018、pp.42-50、査読有。
- 佐藤 仁史「從「滿鉄上海事務所」看日本的華中調査」『蘇州科技大学学報』2017-6、2017、pp.76-86、査読有。
- 佐藤 仁史「近現代中華圏の伝統芸能と地域社会 2016年度現地調査の概況」『中国都市芸能研究』15巻、2016、pp.70-76、査読無。
- 佐藤 仁史「近現代中国における民間信仰と迷信の表象」『近代中国 その表象と現実』1号、2016、pp.314-340、査読無。
- 引野 亨輔「日本近代仏書出版序説」『宗教史研究』90巻1輯、2016、pp.1-25、査読有。
- 佐藤 仁史「被切断の記憶 從一位「富農」的叙述看近代江南的農村社会」『東吳学報』36、2016、査読有。
- 引野 亨輔「江戸時代の地誌編纂と地域意識」『歴史評論』790号、2015、pp.5-18、査読有。
- 佐藤 仁史「近代江南の漁民与信仰 以天主教為中心」『近代中国基督教史研究集刊』10、2015、pp.107-118、査読有。
- 引野 亨輔「江戸時代の献上儀礼と仏教」『千葉大学人文研究』44、2015、pp.85-110、査読有。
- 小関 悠一郎「細川重賢明君録からみえる熊本藩藩政改革」『日本近世の領国地域社会』1、2015、pp.142-190、査読無。
- 小関 悠一郎「一八世紀後半における仙台藩の学問と教諭」『江戸時代の政治と地域社会』1、2015、pp.61-94、査読無。

〔学会発表〕（計13件）

- 引野 亨輔「経蔵のなかの近世と近代 印刷技術の近代化と仏教知の変容」日本仏教総合研究学会、2018年12月9日、於駒澤大学。
- 引野 亨輔「経典を「読む」近世民衆 民衆仏教再考のための一試論」民衆思想史研究会、2018年12月15日、於千葉大学。
- 佐藤 仁史「中国社会中的民間信仰」中国社会史教材的写法學術研討会、2017年11月30日、於蘇州科技大学、國際学会招待講演。
- 山田 賢「江戸の漢籍輸入から見る中日文化交流史」浙江工商大学東語学院講座、2017年3月15日、於浙江工商大学、招待講演。
- 引野 亨輔「経蔵の中の正統と異端」日本思想史学会、2016年10月30日、於関西大学。
- 佐藤 仁史「芸能からみる近現代中国地域社会 最近の宣卷調査を踏まえて」中国都市芸能研究会、2016年5月8日、於慶應大学。
- 佐藤 仁史「芸能・民間信仰からみる近現代江南地域社会史 宣卷を中心に」江南地域社会の回顧と展望ワークショップ、2016年7月2日、於慶應大学。
- 佐藤 仁史「從民間芸能看江南農村与信仰」AoE Workshop on Local Society and its Religious Institutions、2016年9月29日、於香港中文大学。
- 山田 賢「前近代の東アジアにおける「家」と社会」浙江工商大学五洲論壇、2016年3月15日、於浙江工商大学、招待講演。
- 佐藤 仁史「民国時期日本在上海地区的宗教調査：以大谷派僧侶藤井草宣為例」中央研究院台湾史研究所主催第四届族群、歷史与地域社会研討会、2015年11月20日、於中央研究院、招待講演。
- 佐藤 仁史「民俗「復興」的時代性：宣卷与江南農民的民俗生活」全球史視野下的江南文化与社会變遷國際學術研討会、2015年11月14日、於蘇州科技大学、招待講演。
- 佐藤 仁史「清末民国時期的地方志与地域的叙述」香港浸會大学歷史系「明清史 史料与課題」學術研討会、2015年1月9日、於香港浸會大学、招待講演。
- 佐藤 仁史「清末民初政争中地方的对立局勢：以江蘇省嘉定県地方領導、自治、政党為個案分析」地方的近代史：州県士庶的思想与生活學術會議、2014年10月11日、於四川大学、招待講演。

〔図書〕（計7件）

- 岩田 真美・桐原 健真編、引野 亨輔他『カミとホトケの幕末維新』法蔵館、2018、総ページ数390。
- 佐藤 仁史『近代中国的郷土意識 清末民初江南的地方精英与地域社会』北京師範大学出版社、2017、総ページ数437。

華僑華人の事典編集委員会編山田 賢他『華僑華人の事典』丸善出版社、2017、総ページ数、593、山田 賢担当部分「漢族の国内移住について その2：歴史学における研究概観」 pp.14-17。
渡辺 尚志編 小関 悠一郎他『藩地域の村社会と藩政』岩田書院、2017、総ページ数 402。
横田 冬彦・引野 亨輔他『読書と読者』 シリーズ 本の文化史1 平凡社、2015、総ページ数 332。
島園 進・高埜 利彦・林 淳・若尾 政希・引野 亨輔他『書物・メディアと社会』 シリーズ 日本人と宗教5 春秋社、2015、総ページ数 272。
佐藤 仁史・呉 滔『嘉定県事 14 至 20 世紀江南地域社会史研究』広東人民出版社、2014、総ページ数 316。

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小関 悠一郎
ローマ字氏名：KOSEKI,yuichiro
所属研究機関名：千葉大学
部局名：教育学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20636071

研究分担者氏名：佐藤 仁史
ローマ字氏名：SATO,yoshihumi
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院社会学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：60335156

研究分担者氏名：引野 亨輔
ローマ字氏名：HIKINO,kyosuke
所属研究機関名：千葉大学
部局名：大学院人文科学研究院
職名：准教授
研究者番号（8桁）：90389065

(2)研究協力者

研究協力者氏名：趙 景達
ローマ字氏名：CHO,kyondaru

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。